



# 存在するもの すべてに ニセモノがある

上海・襄陽市場閉鎖から1年

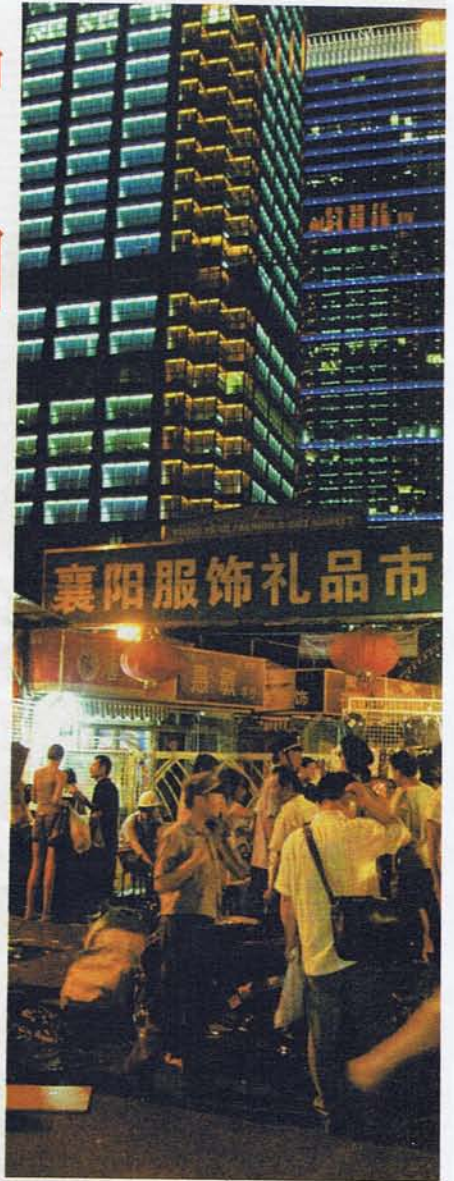
急速な経済発展を遂げる中国だが、知的財産権を守るという意識は、まだほとんど育っていないようだ。昨年6月閉鎖された巨大ニセモノ市場に生活の糧を求めていた人たちの1年を追った。

近藤 雄生



上下／襄陽市場閉鎖時の様子（06年6月30日）。

事情



襄陽市場閉鎖時の様子(06年6月30日)。

# 中国コピー事情

DVD、バッグ、時計などはいうまでもなく、服、車、タバコ、薬、お茶、石鹸、バッテリー、ゴルフクラブ……。もはや、世にあるすべての売れ筋商品にはニセモノがあるといっても過言ではない。世界の貿易取引の五〜七%がニセモノの売買によると推定され、二〇〇五年では六〇〇〇億ドル規模にも及ぶといわれる。

そんな巨大なニセモノ産業の中心にいるのが発展目覚ましい中国だ。

過去の報道を見ただけでも、ビルに設置された「上海三菱」のエレベーターがニセモノ、上海のプラダのフランチャイズ店でニセモノ発見、そしてなんと、NECの会社組織をまるまる「偽造」した会社まであったと

いう。中国のニセモノ事情は想像を超える。

その状況に対し、近年外国からの圧力がとくに強まり、〇六年に入ると中央政府は、知的財産権保護関連法を大幅刷新する旨を発表した。ニセモノの製造・販売業者が捕まるという報道もその頃から目につくようになった。

二〇〇六年六月末、中国有数の「ニセモノ市場」として知られた上海の「襄陽服飾礼品市場(襄陽市場)」が閉鎖されたのは、そんな背景でのことだった。二〇〇〇年のオープン以来、中国ニセモノ産業の象徴的存在だったその空間は、一夜にして姿を消した。

〇六年六月三〇日、営業最終日の午後、二・四万㎡の巨大な

市場の中は、三五度はあろうかという暑さにもかかわらず、「満員御礼」状態だった。「最終日、全品一五元(二元〃約一五円)」といった張り紙の下に、財布、カバンなどのニセブランド品が並んだ。

夜九時半、市場は正式に閉鎖。複数の入り口ゲートは警察によって取り囲まれ、中からは買い物客と、店をたたんだ商人たちがりやカーを引いて次々に出てくる。その熱気と混沌ぶりは、まさに上海の一つの歴史が終わる瞬間を示唆していた。「市場閉鎖は上海市の知的財産権保護の取り組みへの決心を示す。第二の襄陽市場は作らせない」

上海市知識産権(知的財産権)局局长・陳志興はそうコメント

した。

しかしもちろん、中国ニセモノ文化はそう簡単には消滅しない。

## 二重のニセモノ市場

〇六年、市場閉鎖前……。賑やかなショッピング街にある襄陽市場のそばを歩くと、ブランド品のカタログを手にした男や女から声がかかる。無視しても次々によつてくる。

「トケイ、カバン、ミルダケ！」人ごみの中から、彼らは一瞬でこっぴが日本人であることを見抜く。

「三年もやっていると、日本人、韓国人、香港人、台湾人、中国人かは、すぐに分かるよ。服装、髪型とか歩き方とかの雰囲気だね」

山東省出身の二五歳の男Aはそう話す。市場周辺で客引きをし、ニセモノを売ることで、彼は多いときには月に一万元近く稼いでいた。数千元のこともあり安定はしないが、〇六年の上海の就業者平均月収が二五〇〇元ほどと発表されている(実際はもっと多いともいわれるが)ことから考えれば、かなりの額だ。

襄陽市場は、上海を代表する繁華街にあった。屋外の敷地に八七四の店舗がぎっしり詰まり、観光地としても知られ、外国人の姿も多かった。

さらに、市場周辺には、客引きたちが「ソウコ(すなわち「倉庫」と呼ぶ空間がいくつもあ

る。ソウコはどこも古い安住居の一室で、中には、市場では見られない大量のルイ・ヴィトン、シャネル、ロレックスなど、あらゆる高級ブランドのバッグや財布、時計のニセモノが、所狭しと敷き詰められている。市場では大抵には売れない有名ブランドのものを、ソウコで売る。つまり襄陽市場は周囲にソウコがあることで、巨大なニセモノ市場として完結していた。

ソウコの商品は、一見とてもよくできているが、売り手も買い手もニセモノとして売買する。値段は相手次第だ。親しい売り子(客引き)が言うには、

たとえば、仕入れ値五元の偽モンブランのペンを二〇〇元以上で売れば、彼らの勝ち。カバンはいいものだとして仕入れ値が一五〇元くらいで、相手を見て激しくふっかける。

「この仕事は本当に自由なんだ。働きたくないときは家で寝てればいいしね」

市場閉鎖前、先のAがそう話した。彼は高校卒業後、広東省で二年働いたものの、辞めて上海に来た。そしていまは、二児の父親として家族を養う。

私が当時襄陽で知り合った十数人の客引きたちは、みな地方出身者だった。山東省、安徽省、福建省……農村出身者も多く、彼らにとってここでの仕事は、相当魅力的に感じない。何しろ農村では、平均年収が数千円なのだ。福建省出身のあどけなさが残る若い客引きも、この収入で実家の家計を支えていた。

だが、彼らのそんな「華の時代」は、襄陽の閉鎖とともに終焉をむかえた。当初は「別の場所ですれはいい」とみな平然としていたが、現実はその簡単ではなかった。確かに、襄陽のほとんどの店が別の市場で商売を再開したが、売り子の生活は変わっていかざるを得なかった。

## 分散と再生

「移転」先として知られるのは「亜太」「七浦路」「龍華」などの

各市場。それぞれ、知識産権局長の言葉など意に介さず、第二の襄陽を目指し、襄陽閉鎖後に開業した（もしくは、すでにある市場に店が移転）。いずれも、多種の商品が並ぶ大きな市場だが、場所・知名度からいっても襄陽の集客力には遠く及ばない。

上海市東部の浦東地区にある「亜太」は、地下鉄の駅に通じる地下にある。客は多くはないが、その中に西洋人の姿は少なくない。今年五月に初めて訪れたとき、襄陽時代に知り合った売り子の姿がちらほらと見え、私に声をかけてくる。

「久しぶりだな！ 今日は何か買いに来たのか？」

安そうな服やカバンが並ぶ店の裏に、やはりソウコがあった。売り子が密かに私を導いた先は、一見普通の店の中だが、カバンが並べられた棚の一つがまるで忍者屋敷のようにくると回転し、奥の部屋へと続く扉となっていた。そしてその中には、店頭にはない数々のニセブランドのバッグや時計が並んでいた。

「襄陽の時代ほどじゃないけど、商売はまあまあだな。取り締まりも、前より厳しくなったけど、おれたちは捕まらないようになってるんだ。いま警察が入ってきたら困るのはあなたの方だよ」と、オーナー風の上海出身の中年男が冗談っぽく笑った。

店の周りには見回りの警察ら

## 中国コピー事情

存在するものすべてに  
ニセモノがある



襄陽市場付近のソウコの一つ。  
普通の住居の扉の中に商品が見える。

しき人物が複数いるが、彼らは何もしない。そして、市場のいたるところに「保護知識産権」などと書かれた横断幕がかかる

中で、客引きたちが静かに客に声をかけ、ソウコに連れていく。上海市の中心から少し北にある「七浦路」は、よりローカルな地区にある。河南北路という大通り沿いにある大きなビル全体が、活気ある服飾市場となっている。

その前でバスを降りるや否や、売り子が私の姿を見つけて、声をかけてきた。彼もまた「襄陽組」である。

今年五月の段階で、七浦路は一見客も多く、賑やかに見えた。しかし、「全然だめだよ、人は多いけど、外国人が少ないんだ」と売り子は言う。確かに、見たところほとんどの客が中国人だ。売り子が狙うのは、外国人観光客なのだ。

たとえば、普通五〇元以内で買える五枚組みのコピーDVDを、外国人旅行者になら、ときに五〇〇元で売れるという。「スケベ」DVD一枚に五〇〇元払ったのも、カバン一つを四〇〇〇元で買っていったのも日本人だったな」と売り子の一人が笑った。襄陽時代のその味を知っているからこそ、彼らはやめられないのだ。

だが、「襄陽後」のいま、なかなかそんな「カモ」には出会えない。七浦路の売り子の一人は、だから最近、もっと稼ぎのよい裏の仕事に手を染め始めたと話した。

「ここでの商売とは別に、銃やコカインなどを仕入れて売ってるよ。危険だけど金はいい。ニセモノを売るだけでもまあまあ稼げるけど、おれには夢があるんだ。自分の店を持ちたいし、いい車にも乗りたい。山東にいる家族にも金を送ってる。兄貴の大学の学費も高いしな。もちろん、家族にはおれが危ない仕事をしてるなんてことは言っていない」

市の南西部にある「龍華」は、とくに客が少ない。開業間もないころから現在に至るまで、その状況はほとんど変わっていない。「全然客はこないし、商売にならないよ。場所代だけで年に五万円かかるから、とてはやっつけない」

このビルの一階の奥でカバンなどを売る、人のよさそうな男が言う。彼もまた山東省出身の襄陽組だ。

なんといつても場所が悪い。襄陽市場が、旅行者などが大勢いる上海の中心地にあったのに対して、ここは外国人の姿などほとんどない。が、そのせいか、逆にここだけは堂々とニセブランド品が並んでいる。「いまはまだ客も少ないから、



「移転」先の一つ「七浦路」の市場周辺の様子。横断幕には「保護知識産権(=知的財産権)」と書いてある。



